

「初めにことばがあった」

エペソ人への手紙 4 : 29

July.7.2024

## エペソ人への手紙 4 : 29 (パウロ)

### Preface

少し間が開きましたが、これまで数週に渡って、イエス・キリストにある霊の刷新とともに着る新しい人とはどういう人なのか、その内容と実践について見て参りました。

聖書が私たちに語り、また期待しているイエス・キリストにあって新しくされ続ける人のその行い・実践は、私たち自身の個々人の中だけに留めて置き終わらせるようなものではなく、そのすべてが、私の隣にいる人、私とともにいる人、私の周りにいる人との関係に、より多くその焦点が当てられています。

これまで見てきました、偽りを捨て真実を語ることも、怒ったままでいないことも、盗んではいけないということも、そのすべてが隣人との他者との関係に関することでした。

そして、今読みましたエペソ書 4 : 29 の「ことばを発する」というものも、隣人との他者との関係に関することです。

なぜこうも、神を知り、イエス・キリストを信じ、霊において新しくされ続けるということが、人との関りに関することなのかと言いますと、やはりここでも、創世記 1 章から 3 章の内容に遡ることになります。

つまり、人が、神との関係を壊してしまい、ねじ曲げてしまい、唯一まことの神を忘れ、その存在を進んで認識しようとはせず、自らをまるで神であるかのように、または、神ではない朽ちる人間や動物や物や事柄を神とする偽りの神々を信奉してきたその生き方が、結果的にどこに表れるのかと言いますと、人との関係に表れるということです。

なぜ人と人との関係が壊れてしまうのか、その根本的な原因が、「唯一まことの三位一体なる神様との関係が壊れているせいだ」と、「人にとって最も大事な、大事にしなければならない関係が壊れているせいだ」と、聖書は教えて下さいます。

それゆえに、見えない神の御姿なるお方であるイエス・キリストを信じ、新しい人を着、新しくされ続けているそのすべての霊と心が具体的にどこに表現されるのかと言いますと、いつも人との関係に表れるということですね。

## ガラテヤ人への手紙 5 : 13 - 15 (パウロ)

結局のところ、私たちが戦うべき真の戦いは、この御言葉に帰着致します。

イエス様が仰った通りの御言葉ですね。

「神を愛しなさい。それと同じように隣人を愛しなさい。これが全てです」と仰った言葉に、すべてが帰着します。

そして今日の聖書箇所エペソ書 4 : 29 で、使徒パウロ先生は、「悪いことばを、いっさ

い口から出してはいけません。むしろ、必要なときに、人の成長に役立つことばを語り、聞く人に恵みを与えなさい」と、私たちが口にする言葉についての重要な勧めをして下さいます。

言葉こそ、すべての物事の始まりであり、関係の始まりであり、土台であり基礎であり、幸いにもなれば、のろいにもなってしまう、人の営みの中で最も大事な行い・実践になるでしょう。

ところが、その大事さは分かってはいるものの、この使徒パウロ先生の言葉を実践するということは、私たち罪人である人間にとってそんな簡単なことではなくなってしまったように思います。

神の助け、神の導き、神の守り、神のいつくしみ、神の赦し無しには、求めずには、この御言葉を実践することは困難なことだと思えます。

## Part One

元々言葉は、神さまに属するものであり、また、神のかたちに造られた人間が、他のどの被造物造られし物とも違うその違いを最も端的に表す、神から賜わった最も貴い賜物・ギフトのうちの一つであります。ありました。

私たちの生活やこの世界の営み、そして天地万物の神の創造のわざの隅々に至るまで、そのすべてが言葉によって成り立っていること、そもそも言葉の始まりは神からであるということ聖書は私たちに教えてくれます。

聖書は、言葉の大切さを始めから終わりまで一貫して語り続けます。

「光、あれ」という創世記1：3の神の天地創造最初の言葉から始まり、「わたしはあなたがたを愛している」という神の言葉が、人のかたちとなってお生まれになったイエス様。

そして今日の説教題でもありますが、ヨハネの福音書では出だしから、「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばが神であった。このことばなる方こそイエス・キリストであられ、この方にいのちがあり、このいのちは人の光であり、真理であり、道であり、この方の語ることばを知って初めて人は、ことばが何たるかを知る」と説きます。

聖書の最後の最後、黙示録22：20には、「しかり、わたしはすぐに来る」というイエス様のお言葉に応答する「アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵みが、すべての者ととともにありますように」という祝福の言葉で終わります。

聖書は、私たちが毎日何気なく発しているありとあらゆる言葉の根源について教え、その根源を知ることの大切さを語り続け、初めて人が聞いた言葉は、誰か他人間の言葉ではなく、神さまの言葉であったということを知らせてくれます。

無限であられ、全知全能であられる三位一体なる神様は、天地創造のその瞬間からもう既に私たち人間とともにいて下さり、沈黙の中でご自身のことを隠されるのではなく、むしろ、人が理解出来る言葉をもってご自身を表して下さり、私たちにとって必要なものすべてを説明して下さい、ご自身のかたちに造った私たち人間に絶え間なく祝福の言葉を掛け続けて下さいました。

「わたしの言葉を聞きなさい」と語り続けて下さっています。

そして、言葉を聞くだけでなく、他のどの被造物には備わっていない、言葉を語るという

神のかたちに造られた証しとしての能力をお与え下さりながら、人を言葉を語る者として、言葉をもって事を成す尊い存在として立てて下さいました。

ところが残念なことに、神から始まり、神によって私たち人間に授けられた祝福である言葉が、人や造られしすべてのものに恵みや幸いもたらすだけではなく、むしろ、のろいを与えてしまう、いや時には、のろいしか与えないことさえもある程に墮落してしまったことをも、聖書は躊躇なく語ります。

## Part Two

事実、「言葉ほど難しいものはないなあ」と思わない人は、誰一人としていないのではないのでしょうか。

あるクリスチャンカウンセラーの方が、カウンセリングをしていく中で、様々な言葉についての失望や葛藤の話を聞きました。

いくつか紹介致します。

「以前は、これから結婚して一緒に暮らすようになった時、私たち夫婦がこんな風に会話するなんて考えもしませんでした。」

「うちの息子があんなことを口にすると、私は耳を疑うしかありませんでした。」

「彼女は、話している途中で電話を切ってしまうのです。」

「私が問題を起こす度に、両親は、とてもひどい言葉を私に浴びせかけてきます。」

「彼は、何かを求める時だけ、優しく語り掛けてきます。」

「夫は、『他の人と話をするのが苦痛だ』と言います。」

「妻が、他の人に話をする時のその話し方が、耳障りです。」

「私たちは、全くもって十分な会話を交わしたことがないと思います。」

「その人は、とても多くの言葉を語りますが、何を言っているのか全然見当が付きません。」

「何で私たちはいつも、口喧嘩をしながら会話を止めてしまうのか分かりません。」

「何でこんなことになってしまったんでしょう。私たちはとても仲が良いと思っていたのですが、今は、ほとんど言葉を交わしません。」

「私は、子どもたちの口喧嘩を止めさせることに、時間のほとんどを消耗してしまいます。」

「夫は、私に許しを乞いました。しかし私は、今もそのことのせいで辛いんです。夫の言葉があまりにもショックだったので…」

「私は、私の家族が、たった一日でもいいので、誰も怒鳴り声を張り上げることなく過ごせたら幸いです。」

「私は何で、おしゃべりすることで、時間を全部無駄に使うのか分かりません。おしゃべりしたからといって、何かが特段変わるわけでもないのに…」

「そこにいる人が皆、自分のことだけ話すならば、絶対に会議は成り立ちません。」

「姉はいつも、自分のことばかり話します。」

「彼は、人前に出た時だけ、私に優しく話してくれます。」

「私たちみんなが、はなっから全く、言葉を発しないで生きられたならば、もっと良かったのになあと思います。」

「私のことだ」と思えるような内容があったでしょうか。

言葉で後悔したことの無い人もいなければ、言葉で葛藤していない人もいないという事実の中に、私たち生かされております。

傷つけるつもりで発した言葉ではないのに、傷つけてしまった。

また、人が、傷つけるために発した言葉ではないのに、むしろ、励ましたいと思って語り掛けてくれた言葉なのに、その言葉に傷つき、その言葉に対していつまでも恨みを持ち続け、その言葉の間違いに執着し、自分の言葉や考えの方が合っていると思いつけてしまい、そう思いつけることが正義だと、正しいことなんだと、これまた思いつけてしまうというようなことが、よくと言いましょか、日常茶飯事と言いましょか、少なくない数、誰にでもあるのではないでしょか。

私自身も、「あの人のあの言葉がいけないんだ、いけなかったんだ」と挙げようとするれば、すぐに挙げる事が出来てしまいますし、「何であんな言葉を選んでしまったんだらう…何であんな言葉を言っちゃったんだらう…」という後悔も一度や二度ではありません。

### Part Three

父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体なる神様が、人間が、他のどの被造物とも違う特別な存在であることを示すために備えさせて下さった最も貴い神からのギフトが言葉であるがために、人は誰もがその言葉の重要性に、本能的に気付いているように思います。

それゆえ、良くも悪くも、言葉に執着してしまうように思います。

自分が発した良い言葉だと思われるものは、自画自賛のために、いつまでも心に留めて置こうとしますが、自分の発した良くなかったと思う言葉は流そうとします。

逆に、人の良かったと思う言葉は意外にもすぐ忘れ、受け流そうとしてしまいますが、自分にとって良くない言葉だったり、感じの悪い言葉を投げかけられたりすると、その言葉から受けた傷をいつもまでも忘れないために、そして「その言葉を発した人を正当に憎んでいいんだ」という根拠として、自分の内にいつまでも留めておこうとする罪深い姿が、誰にでもあるように思います。

もう15年以上前になるとと思いますが、牧会塾という牧師を対象にした講義を聞いたことがあるのですが、その講義の中で、講師の先生が忘れることの出来ないショッキングなお話をして下さいました。

その先生が講義をして下さった時のお歳が60代中盤だったのですが、先生が50代半ばの時、当時牧会をしておられた教会の役員もなさったことのある一人の教会員の方が「先生、お話があります」と仰って、訪ねて来られたそうです。

そして、その方がこんなことをお話しされました。

「先生、先生が20代のまだ若かった頃にお話しされたあの言葉が、27年間ずっと忘れることが出来ず、今の今まで私の心の傷として残っています。なので、申し訳ないのですが、今日を持ちまして、この教会から離れたしたいと思います。」

四半世紀以上も心に抱いていたわけですから、その教会員の方も、さぞ苦しかったことだ

ろうと思います。

と同時に、この言葉を27年越しに聞いた先生も、どれだけショックで苦しかったことだろうかと思っています。

足りない言葉や表現をもって人を傷つけてしまったことが少なくない私にとっても、決して忘れることの出来ないショッキングな実話であり、そのお話を伺った時から今に至るまで、一人間としても、牧師としても、ずっと身に詰まされる思いがしております。

人は、良くも悪くも、言葉に執着する習性があるようです。

創世記3章に記録されている通り、神から語り掛けられた祝福の言葉を大切し守る代わりに、蛇に化けたサタンの言葉を信じたその時から、人は誰もが、自分の都合のいいように、捉えたいように言葉に執着する習性が出来てしまったようです。

そうして人は、祝福の言葉を神から与えられたにもかかわらず、のろいの言葉をもって、人をのろってしまうようになりました。

だから神様は、使徒パウロ先生の口を通して、「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。むしろ、必要なときに、人の成長に役立つことばを語り、聞く人に恵みを与えなさい」と、愛をもって私たちに言葉の実践を促して下さいます。

「ことばを語り、聞く人に恵みを与えなさい」とありますが、恵みとは何か？

受けるに値しないにも関わらず与えること、与えられることが恵みです。

そして、私たち人間にとっての究極の恵みは、神を覚えることですよね。

主イエス様の愛を覚えることが恵みですね。

つまり言葉の実践において重要なのは、同じく言葉によって失敗する者同士であることを互いに覚えつつ、神のあわれみと赦しが必要な者同士であることを忘れないこと。

今も祝福の言葉を練習している者同士なんだと、ともに神の恵みによって生かされているということを分かち合うことです。

### Part Three

言葉を、学問的に、言語学的に、または倫理道徳的に考察することも大いに意味のあることではしょうが、ある意味それは表面的なことで、聖書は、もっと深い、霊的なものとして、命にかかわるものとして、言葉を教えてくれます。

戦中、ナチスドイツが様々な人体実験を行ったことが知られていますが、その中でも、とても静かな残忍性に富んだ人体実験がありました。

産まれて間もない赤ん坊に、一方は、体が育つのに必要な栄養分とともに、毎日抱っこしながら言葉を語り掛け、もう一方は、肉体に必要なすべての栄養分は与えるものの、一切言葉を掛けないという人体実験をしました。

すると、毎日言葉を掛け続けた赤ちゃんは、すくすくと成長していきましたが、言葉を一切かけない赤ちゃんは、必要な食べ物栄養分をしっかりと与えているにも関わらず、毎日日に日に弱っていき、遂には亡くなってしまいました。

人とは、こんなにも静かに残忍になれるのかというような人体実験を通して、実証的にも、「言葉はいのちだ」ということを、「言葉には人を生かす力も、殺す力もある」ということ

を明らかにしました。

どんな言葉を掛けるのかが、人の生死を左右します。

植物や、動物も、掛けられた言葉によって、咲かせる花の質が変わり、情緒が変わっていくことも明らかにされています。

そんな命までも左右するほどの言葉という大切な能力を用いていく中で、ともすると、のろいの言葉がつい口をついて出て来てしまうような私たち罪人にとって、実のところ最も大事なものは、赦し、赦すことであるというのを、聖書は、イエス様はいつも私たちに教えて下さいます。

### マタイの福音書 18 : 21 - 22 (パワポ)

ペテロが、「私は人を7回までも許す覚悟が出来ていますし、赦すことが出来るような人です」と、自らのことをイエス様にしれっと誇ったところ、イエス様はペテロに、「いやペテロよ、7回どころか、7の70倍まで赦しなさい」と仰りながら、「傷つけられたことに執着する生き方ではなく、『私も人を傷つけながら生きているし、人を傷つけずには生きられない』という神の赦しと愛のうちに許されている存在でしかないんだという自覚をもって生きなさい」と、人と人との関係において最も大事な守るべきことを教えて下さいました。

この自覚こそが、私たちをもってして、「悪いことばを、いっさい口に出してはいけません。むしろ、必要なときに、人の成長に役立つことばを語り、聞く人に恵みを与えなさい」という御言葉の実践・練習へと促す最も大事な要素ではないだろうかと思うのです。

「罪無き者なんか誰もいない。あの人の罪よりも、私の罪の方が軽いなんてことは神の前にはあっては無く、あの人があの罪において罪人であるならば、私も当然その罪において罪人であり、いやむしろ、あの人よりももっとひどい状態の罪人であることは間違いのない事実だ」という、イエス様の十字架上の死を「私の罪だ」と鮮明に思い返し、祈ること、祈り心を持つことが、言葉を通した恵みの実践において最も大事なことでしょう。

実際に、エペソ書 4 : 29 の御言葉に続く 32 節でこのように言っています。

### エペソ人への手紙 4 : 32 (パワポ)

「赦し合いなさい。神も、キリストにおいてあなたがたを赦して下さったのですから。」これこそ、私たちの言葉の回復と実践における、最も大切な要点なんだと思います。

そして、この要点を思い出させて下さり、実践へと促して下さる方が、聖霊です。御霊なる神です。

今日の聖書箇所エペソ 4 : 29 の「ことばをもって、恵みを与えなさい」という御言葉に続く 30 節の言葉が、

## 神の聖霊を悲しませてはいけません (パウロ)

という御言葉であり、説教の始めの方でお読みしましたガラテヤ書5章の「互いにかみつき合ったり、食い合ったりしているなら、互いの間で滅ぼされてしまいます」という御言葉に続く言葉も、聖霊です。

## ガラテヤ人への手紙5：13-18、25-26 (パウロ)

「うぬぼれて」、つまり、「私の罪人の度合いは、あの人の罪人の度合いよりも軽い、マシだ、いい方だ、いやむしろ正しい」という罪人としての自覚の欠如に気付かせて下さるのが、聖霊なる神様です。

私たちに期待されている言葉をもって恵みを言い表すことの実践は、私たちの技量、度量、能力でなすものではなく、聖霊様の助けによって、導きによって、聖霊を求めることによって、恵みとして実践させて頂くものです。

### Conclusion

私自身、牧師と言う立場にありますので、日々、言葉をどう発するのかについて悩み、葛藤し、恐れを抱き、祈っております。

それでも、失敗します。

「もう人前で、言葉を発しなければならない牧師なんていう仕事、辞めてやる」と思ったこと、口にしたこと、その口に言葉を聞いた妻に、「ダメ！ 牧師は、あなたが辞めたいからといって辞められるものではなく、神さまが『もうそこまで！』と仰るまで、やるの！」と諭されたこと、数知れず。

家族と喧嘩して、自分の思い通りに、自分の願った通りに、自分の要求通りに動いてくれない反応してくれないと勝手に怒って、「僕は正しい」と家族の誰とも口を利かない日々を過ごしたことも数知れず。

自分の発した「正しい」と思っている言葉に愛着を抱き、人の発した「間違っている」と気分を害する言葉にはネチネチと執着を抱くことも数知れずです。

でも、そのすべての数知れない状況を解くカギは、いつもイエス様です。

イエス様の赦し、イエス様の十字架、イエス様の愛、イエス様の平和を、イエス様の恵みを、内なる聖霊様が思い出させて下さり、思い出させて頂いたならば、その促しに応え、「ごめんなさい」と告白します。

その告白が、癒しであり、恵みです。

神さまは、私たちが言葉に失敗することを、誰よりもよくご存じでおられます。

それでも、私たちが諦めなされることは一切せず、私たちのこの口を通して、神の愛を、主イエスの救いを、恵みをお語りになります。

いやむしろ、自分の要求を通そうとすることばかりを、罪なる本能に従って言葉を話そうとする私たち人間をお選びなされ、私たちをもってして、恵みを語る人へと変えなされ、変えなさろうと、今も私たちに熱心に働いて下さいます。

エペソ書4：29の御言葉の実践・練習の中に入れられている恵みを共に覚えながら、聞く人に恵みを与える者となれるよう祈っていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ4：29